

動詞の後の「于」「於」は 「動作の完成」を表すか

杉田 泰史（早稲田大学）

キーワード：未然構文、古典中国語、格、アスペクト、他動詞性

0 「于」「於」は「完成」「已然」を表すという考え

『左伝』における古典中国語の一部の他動詞構文に、SVO とは別に SVYuO (Yu は前置詞「於」「于」「乎」) という文型を取るものがみられる。筆者はいくつかの論文及び同内容の発表においてこれらの例に「動作の実現が不完全である」という共通の特徴が存在することを指摘し、これを「Yu の未完了用法」(のち「未然構文」)と名付けた。

発表に対する意見のうち、何度か聞かれたものに、「このような構文はむしろ動作の已然を表すのではないか」という意味のものがあつた。この意見を検討するに当たり、筆者が見ることができた「定説」と思しきものは、たとえば何樂士による『《左伝》的介詞“于”“於”』(101-2 頁)に以下のような形で引かれている¹。以下、引用が長くなるが議論に関係する箇所を訳出する(引用の訳は杉田によるもの)：

[(主) 動于 b (場所)] この文型は常に動作行為の場所を表

¹何(1989)は北京出版社から1987年に出た『古漢語研究論文集』(三)に収められた同名論文に加筆訂正したもののだが、小論に引用した箇所は初出版には無い。何氏論文における『左伝』の引用箇所は魯の年号と楊(1981)における巻数、頁数を表す。杉田による引用には鎌田正『春秋左氏伝』(明治書院、新釈漢文大系)における年号と通し頁数を記す。文型の分類における[(主) 動于 b (場所)][(主) 動於 b (場所)]は筆者におけるSVYuOに相当し、ここではYuを「于」「於」に分けて説明している。「動」は述語動詞を、「b」は目的語(賓語)を意味する。「場所」は原文では「処所」。以下、主要な言語学用語の大半は日本のそれに合わせて訳す。ただし「完成」はアスペクトの概念としては日本語の「完了(態)」perfective (aspect)に相当するが、日本でこの用語は「完了」perfect と混同される傾向があるので原文のままとする。

していると同時にアスペクトにおいてすでに完成していることをも表す。例えば：

- (1) 元咺帰于衛，立公子瑕。(僖 28) 1.473…元咺は衛に帰り、公子瑕を衛の国君に擁立した。

時にはその前に年月日もあり、動作がすでに完成しているという意味が更に明確である。例えば：

- (2) 十年春，会于柎。(襄 10) 3.974…襄公十年の春に、(魯の襄公は) 柎の地で諸侯と会合した。
 (3) 五月丙午，晋公及鄭伯盟于衡雍。(僖 28) 1.463…五月の丙午の日、晋公は鄭伯と衡雍の地で和睦を誓った。

この特徴は《春秋経》の中で特に突出して表現されるものであり、《左伝》中の経文と同じもの 295 例は、すべて既成の事実を表すものである。先進の学者もこの文型の特徴に早くから気づいており、兪越は《郡書評議》の中で《尚書・盤庚上》の「盤庚遷于殷，民不適有居」について解釈する際に、第一句から「『遷于殷』とはすでに移った事を言う」と書いている²。楊伯峻先生の《春秋左傳注》は襄公 16 年の「諸侯遂遷許」に注して「実際には許を移そうとしてうまくいかなかった。ゆえに移した先の地を書かないのだ」という³。(例文(4)(5) 含め中略)

[(主) 動於 b (場所)] にもこの種の完成を兼ねて表す用法がある。例えば：

- (6) 冬十月(中略)[艸遠]射以繁揚之師会於夏汭。(昭 5) 4.1270
 …冬の十月に、[艸遠]射は繁揚の軍隊を率いて夏汭の地で(楚子の軍と)合流した。

しかし「於」のこの用法は「于」の構文のようによく見かけるものでは全くない。「於」の構文はふつう恒常的な時間か常に起こる事柄を表すのに用いられる。例えば：

²原文：“遷于殷”是既遷矣。

³原文：其实是將遷許而未成，故不書所遷之地。

- (7) 内寵之妾肆奪於市，外寵之臣僭令於鄙。(昭20) 4.1417…
 廷内の寵姫は市場で品物を奪い取り、廷外の寵臣は辺境
 で君命を騙るものだ。

時にはやろうとするつもり的事柄(原文・打算要干的事情)を
 表す。例えば：

- (8) 闕廉曰：“(中略)君次於郊郢以禦四邑，我以銳師宵加於
 郢。”(桓11) 1.131…闕廉は言った、「(中略)あなた(屈
 瑕)は郊郢で待機して四か国の軍を防ぎなさい、私は精
 銳を率いて郢に夜襲をかけましょう」

小文は何氏論文の以上の箇所について再考し、併せて古典中国語の領域
 においてSVYuOが「動作の完成」を表すと伝統的に考えられているらし
 き事について、その妥当性を検討する。

1 Yuは一次的には格を表す

「乎」「于」「於」のいずれにおいても、その後続く名詞句の意味役割
 を文法書で見ると「動作の行なわれる場所」「行く先」「話し相手」「比較
 の対象」等々、一見すると多様であるが、実際には動詞によってかなり固
 定されている。移動の動詞ならば行く先を表示し、伝達の動詞ならば話し
 相手を表示し、程度の形容詞ならば比較の対象である。それ自体は場所を
 特に必要としない意味内容の動作動詞のときに最も結びつきのゆるい「動
 作の行なわれる場所」を表示するのが一般的である。

動詞の後においてYuを伴う項と伴わない項とは、一般的には別々の意
 味役割を負うことが多い。『論語』における伝達の動詞「問」を例にと
 る(括弧内は編次)、

- (9) 子張問政。(12.14.) …子張が政治について質問した。
 (10) 南宮适問於孔子曰… (14.5.) …南宮适が孔子に質問して言った
 (11) 季康子問政於孔子曰… (12.19.) …季康子が政治について孔子に質
 問して言った

のように、[問+(N₁)+(Yu+N₂)]という構文が見て取れる。この時 N₁ と N₂ にはそれぞれ「質問のテーマ」「問われる相手」の意味を持つ名詞句が入り、両者の間に混用はない。移動の動詞の場合、同型の構文 [V+(N₁)+(Yu+N₂)] において（以下の「遷」の例にも典型的に見られるが）N₁ は使役の目的語（すなわち移動の主体）、N₂ は行く先を表示する。

Yu はどの動詞を直前の述語としているかによって、それぞれ決まった格の役割を担う。これは Yu の一次的な機能である。ここで争点となっているのはごく一部の例に見られる二次的機能、すなわち名詞の格ではなく動詞のアスペクトの機能を担うか否か、担うとしたらどのような役割かという点である。

筆者が「未然構文」と判断した他動詞構文における直接目的語をマークする Yu の用法は二次的な存在であると思われる。もしその動詞に固有の格としての Yu を要求する構文が存在する場合、そちらを優先させて解釈しなければならない。

2 動詞「遷」の Yu は行く先をマークする

『左伝』における動詞「遷」が後続する名詞句によって取りうる文型は、

遷+(N)+(Yu+Loc)

である。N は移動する人や物、Yu は「于」又は「於」、Loc は移動先の場所とする。『春秋』では経・伝ともに、大國が小國や邑を移動させる例が目につく。一方の（ ）内は省略されることもある。すなわち、

1. 「遷+N」: 「…を移動させる」の意（経 3 例・伝 12 例）:

(12) 哭而遷墓。(哀 2.1750) … (蔡侯は先祖に対し) 哭の礼を行ってから墓を移動させた。

2. 「遷+Yu+Loc」: 「～へ移動する」の意（経「于」7 例・伝「于」15 例）⁴

⁴ 『左伝』において、
 攝王奸命，諸侯替之而建王嗣，用遷郊[曠]。 (昭 26.1573) … (周の) 攝王が先王の命に従わなかったため、諸侯は彼を廃して世嗣を立て、そうして郊[曠]に移り住んだ。

(13) 諸侯遷于制田。(成 16.802) …諸侯の軍は制田(地名)に移動した。

3. 「遷+N+Yu+Loc」:「…を～へ移動させる」(経に例なし・伝「于」9例、「於」11例、「N焉」2例、「諸N」1例)⁵

(14) 遷頼於鄢。(昭 4.1271) …(楚王は)頼の国を(楚の領内の)鄢の地に移動させた。

である。こうして見ると「諸侯遂遷許」に対する楊氏の注は、Yu及びそれによってマークされる「移動先」の名詞句が存在しないという事実を述べているに過ぎない。これと同じ文型の(12)は未然ではなく既然の動作を現している。何氏は「V+于+Loc」(Locは地名)の文型が経文で既に起こった事に多く使われると指摘しているが、元来『春秋』の経文(伝と違い)は実際に起こった事だけを簡潔に述べるものであり、「やろうとして思いとどまったこと」「始めたが妨害されて達成できなかったこと」などが書かれることは極めてまれである。従って同じ動詞、同じNの意味役割に対してYuの有無によって既然と未然が区別される例を探し出すことは不可能であろう。

また上記1.と2.において経・伝共にYuに「于」が使われている事、経に無い構文である3.においてのみYuの形に「于」「於」の両者が拮抗している事から分かるように、「伝」は「経」の方言に文体的な影響を受けており、その影響の及ばない、より複雑な文においてのみ新たな構文の発

という例が「遷+Loc」というYuを使わない例外的な構文を示しているが、これは王子朝が諸侯にはるか昔の史実を話している場面であるため、「遷」のアスペクトは既然であり未然ではない。したがって何氏による楊氏の注の解釈はこの例には当てはまらない。なお筆者は、この例外の原因を、周代のより古い記録を引いたために起こった文体差ではないかと考えている。

⁵()内を補足すると、伝においては「遷+N+Yu+Loc」という構文のうち、Yuに「于」を用いたものが9例、「於」を用いたものが11例と拮抗している。「Yu+之(=N)」をいわず合音字「焉」で表した「遷N焉」が2例、同じく「+Yu」を「諸」で表した「遷諸N」が1例あり、これらについてはYuが「于」「於」「乎」のどれであるか判別できない。なお、中国では李(1994)のように、このような移動の動詞における1.や3.のような文型を使役文(使動法)ととるのが一般的である。筆者はこれに同意するが、より広い[V+N₁+Yu+N₂]という文型を論じるために、ここでは深入りしない。ただ、中国語学においては自明のことではあるが、移動動詞のような他動詞性の低い動詞では[V+N₁+Yu+N₂]のN₁は使役文の兼語となる、という点は、言語一般における他動詞性と使役との関係を論ずる上で興味深い。

遠を覗かせているのである。

以上の事から「V+于+ (地名)」の構文に関する「《左伝》中の経文と同じもの295例は、すべて既成の事実を表すものである」という何氏の主張は、それ自体は正しいが、そこから文法規則を導くことのできる重要度を持った性質の現象ではないと思われる。

3 その他の動詞もそれぞれ格を表し、「既然」ではない

(1)の例文における動詞「帰」は[帰+Yu+Loc]で「～へ帰る」、[帰+N]で「…を帰らせる」、[帰+N+Yu+Loc]で「…を～に帰らせる」という意味になり、Yuの有無が紛れることはない。また「嫁ぐ」「贈り物をする」といった意味もあるが、いずれの場合も共通していることは、ここでのYuは典型的な移動の動詞における行く先表示の格を担うことである。「元咺帰于衛」とは「元咺が衛に帰った」ということだが、Yuすなわち「于」が動作の既然に一役買っているという保証はない。

(2)の例文における動詞「会(會)」、(3)の例文における動詞「盟」は『春秋』の経文によく登場し、いずれも動作の行われた地点を[SV 于(場所)]の文型によって表すことが多い。地点がよく登場するのは『春秋』という書物の要求することであり、「誰が」(主語)「誰と」(目的語)という項に比べると「会う」という動作が必然的に求める項ではない。このような一般的な動作を表す動詞にYuが付くと、動作の行われる場所を表示することになる。「盟」を例にとると、

- (15) 齊、鄭盟于石門。(隠3.64) …齊と鄭が石門で盟約を結んだ。
- (16) 莫敖以王命入盟隨侯。(莊4.171) …莫敖(の位の屈重)は楚王の命令だと言って入国し隨侯と和睦した。
- (17) 秋、齊侯盟諸侯于葵丘。(僖9.294) …秋に、齊侯は葵丘で諸侯と同盟を結んだ。

のように、[盟+(N)+(Yu+Loc)]の形でN(同盟相手の国または人)とLoc(同盟を結んだ土地)との違いは、明確にYuの有無によって区別される。従って、やはり[Yu+Loc]には既然を表す余地がない。

また、「于」ではなく「於」に付いて触れたくだりは何氏自身が認めるとおり、いっそう Yu が既然を指すことの証拠に乏しい。恒常的な出来事は既然 vs. 未然といった動作の実現を超越した概念だし、「やろうとするつもり」の事柄は既然ではなくむしろ未然である。(8)の例における「加於」がそれを表すかどうかは、動詞「加」がその後ろにおいてどのような文型を取るか、その全体を観察しなければならないので、この例だけでは何とも言えない。

4 まとめ：現代語における結果を表す補語からの類推

何氏の引く愈樾のような考え方は、現代語における動詞の後に付く結果を表す補語となる介詞からの類推であろう。現代語ならば、「坐在椅子上」「搬到新房裡」における「在」「到」の如く、その前に置かれる動詞は既然の動作として現れる。しかし現代語でそうだからと言って、古典語もそうである保証はない。愈樾をはじめとするこの種の分析は、現代漢語の語感によって古代漢語を解いた為に生じた誤解に始まると思われる。

以上見てきたように、先秦漢語において、動詞の後に Yu が続き、それがしばしば動作の「既然」「完成」を表すという考えは、歴史文献という資料の性質から来る誤解と、現代漢語の介詞補語に対する現代中国人の語感を類推して当てはめた結果生じており、すべて個々の動詞の要求する格の違いによって説明可能であると思われる。

なお、筆者がかつて挙げた「未然の Yu」はこれら動詞の要求する格の可能性をすべて考慮した上で、なお説明の困難である他動詞構文の直接目的語に Yu が使われる例に限られるため、ここに述べた問題点に抵触しない。今後とも個々の動詞の記述と分類を進行させ、Yu の未然用法の問題をよりいっそう明確にすることが求められる。小論はその前段階として、筆者が発表した際の反論に答える目的を兼ねて通説への再検討を試みたものである。

【参考文献】

郭錫良主編 1998 《古漢語語法論集》 語文出版社, 北京

何樂士 1989 《〈左傳〉的介詞“于”和“於”》《左傳虛詞研究》所収, 商務印書館, 北京

李佐豊 1994 《文言実詞》語文出版社，北京

Sugita, Yasushi. 1994. Imperfective use of the preposition “YU” in Archaic Chinese. *Current issues in Sino-Tibetan linguistics*, Osaka.

杉田泰史 1998 《介詞“于”的未完成用法》，郭(1998)所収

杉田泰史 2000 「『左伝』にみられる古典中国語の未然構文」『人文論集』第38号，早稲田大学法学会

楊伯俊 1981 《春秋左伝注(修訂本)》，中華書局，北京

Does the preposition “Yu” following the verb mark completeness of the action?

Yasushi SUGITA

The author proposed a hypothesis that a preposition Yu turns V-O sentences into V-Yu-O patterns, which code speakers' negative attitude about realizability of the action or event of V, and named it 'irrealis construction'. However, some linguists have traditionally argued that V-Yu-N patterns sometimes code completeness of the action, unlike the author's hypothesis.

HE Leshi's examples cited from *ZUO ZHUAN* are reconsidered here. Some of the sentences of so-called complete actions are historical descriptions under the influences of *CHUN QIU*, a document which exclusively describes "what happened", not "what was going on". All the sentences are with Yu which only marks oblique cases of addressee, goal, place of the action, etc. Yu of completeness sometimes also accompanies the same verbs which code incompleteness of the action.

Misled tradition must have come from the similarity between Archaic Chinese and Modern Mandarin, in an apparent observation, which has resultative complements originated from prepositions. But these two grammars should be analyzed independently.

sugitay@waseda.jp